

行動すること、声を上げること

祖父は私が小学生だった頃、アルツハイマー型認知症と診断されました。それは祖父のことが大好きだった私にとってあまりにも辛すぎる報告でした。週末にはバスに乗って通っていた市立図書館、テレビの前で声を上げて応援するほど好きだった野球観戦、名前や電話番号を覚えてもらえるほど頻繁に通っていた近所のコンビニ、今ではそのどれも祖父一人ではできません。

ある週末、祖父はいつものように一人でバスに乗って図書館へ行きました。いつものバスで、いつものバス停に、いつもの時間に帰ってきましたが、その日は、祖父がいつも持ち歩いているカバンを手を持っていませんでした。図書館に電話をしたところ、忘れ物として取っておいてあるとのことなので、後日取りに行きました。しかしまた次の週、帰ってきた祖父の手を見ると、何も持っていません。忘れていたのです。今度は図書館から電話がかかってきました。「他のお客様のご迷惑にもなりますので、今後のご来館はご遠慮いただきたいです」とのことでした。私は、ほとんど人とかかわることのない図書館でさえ認知症の祖父では行くことができないのかと、図書館の利用者、管理者に苛立ちを覚えると同時に、他者と共に生きることの重要性、難しさを感じました。認知症は、私たちの生活においても深刻な問題ですが、その対応には偏見のない親切的な視点が必要であると思います。

社会全体が持続可能な未来を迎えるためには、人々の健康や福祉が整っていることも例の一つに挙げられるでしょう。ワンガリ・マータイさんは、「環境保護や社会的な変革」の重要性、そして「声を上げること」の重要性を説いています。彼女の言葉から私たちが学べることは、個人の行動が集団の変化をもたらし、その変化が社会全体に広がるという点です。私も祖父のケアに関する経験を通じて、友人を始めとした地域の方々に認知症についての理解を深めてもらうために、市で開催される地域共生を目的とした討論会への参加や学校の福祉に関する授業での発言、地域の福祉施設の状況を知るための訪問などの努力をしています。私たち高校生も、小さな一歩を踏み出すことで大きな影響を与えることができるのです。また、私たちには周囲の人々に対して持続可能な開発の重要性を伝え、継承していく役割があります。私たちが意見を発信し、持続可能な開発に対する関心を高めることが、社会を変える力になると確信しています。学校のプロジェクトや地域活動を通じて、誰でも環境保護や社会的な支援の必要性について意識を高める活動を行うことができるのです。このように、一人一人の小さな行動が、持続可能な未来に向けた大きな力となるのだと考えます。